

27 年度県外視察研修報告

茅野市立永明小学校 小林 一博

【研修テーマ】学びをとらえる教師の資質や能力と子どもが主体となる造形的な創造活動のあり方

- 1 視察期日 平成 27 年 11 月 27 日（金）
- 2 視察場所 東京都台東区立上野小学校
 - ・明治期から美術館や博物館が建築され、アートの発信地となっている台東区にある。
 - ・約 2 年前より東京都図画工作科研究会員（東京都図画工作科専科教員）が乗り入れ授業を行い、会員が授業者として全学級公開。
 - ・敷地内に清島幼稚園が併設されており、5 年生と年長児による造形活動も公開。

3 研修報告

(1) 研修の概要

東京都公立小学校の図画工作科専科教員が先進的な実践を公開している東京都図画工作科研究大会を視察し、子どもの創造活動の学びをとらえる教師の資質や能力、子どもが主体となる造形的な創造活動のあり方について考える。

<授業学級及び題材名・活動内容>

授業学級	題材名・活動内容
1 年 1 組	わくわくねんどのみち
1 年 2 組	なかよしぬーの
2 年 1 組・2 組	大ぼうけんにつれてってクレヨン
3 年 1 組	いろいろまぜて まぜて見て
3 年 2 組	びっくり！ねんど工場
4 年 1 組	この宝物はね
4 年 2 組	ツル・ザ・ペーパー
5 年 1 組	触り心地のプレゼント
5 年 2 組・年長児	なにしよっか？
6 年 1 組	わたしだけの花
6 年 2 組	わたしの国立西洋美術館（感）



(2) 研修から学んだこと

『教える』スタンスではなく、子どもの価値創造を『引き出す』スタンス

- C「もうちょっと柔らかくしたいんだけどなあ」（でんぷんのりの容器を手取る）
- T「どれどれ、先生にも触らせて」（児童の粘土を両手でゆっくりと握って練っていく）
- C（教師の手元と顔をじっと見ている）
- T「ほんとだ。もうちょっと柔らかくしたいって」（児童の顔を見ながら）
- C「ね。だから、でんぷんのり、もうちょっと入れたらいい感じになるはず」
- T「さすがだね」（児童の顔を見ながら頷く）
- C「このくらいかな」（容器から少しずつでんぷんのりを垂らす）

一人一人が液体材料（水、でんぷんのり）と粉体材料（乾燥陶土、おがくず、粉末粘土、学校の土砂）を混ぜ、自分のオリジナル粘土をつくる 3 年 2 組『びっくり！ねんど工場』。教師は、子どもの粘土を同じように握り練っていくを通して、子どもの感じたことのよさを「さすがだね」と感嘆の言葉を伝えていた。教師の子どもの価値創造を『引き出す』姿であり、子どもの造形的な創造活動の学びを支える指導の重要な視点だと感じた。

『感じる』『想う』『やってみる』『かかわる』が響き合う学び

全学級を参観し、子どもや教師の姿から得た感動がある。それは、子どもの能動的な行為からはじまり、『感じる』『想う』『やってみる』『かかわる』という要素が響き合う授業。そして、その過程で様々な能力を発揮し、その表現は自ら創造した価値であるということである。

5 年 2 組と年長児による『なにしよっか？』。段ボールに入って段ボールの内側を指さしながら年長児が 5 年生に話をしている。膝をついて聞いていた 5 年生は、材料コーナーに急いで行き、水色の画用紙を持って来る。5 年生に見守られながら、年長児は慣れた手付きで 2 センチ角の大きさに切る。5 年生は拍手をして、その画用紙片を指さし、「すごい」の一言。「付けたい」という年長児の言葉に、のりを差し出し、年長児と一緒に塗る。画用紙片を持った年長児は、段ボールの中に入って、指さした段ボール面の真真中に貼る。段ボールに顔を入れていた 5 年生は、拍手をして、画用紙片を指で撫でる。

時間にして 3 分ほどの 2 人の造形活動であるが、4 つの要素が響き合い、2 人にとっての造形的な価値が生まれた時間であったと思う。

(3) 研修を通しての自己課題

「子どもが主語になっていることが大切」

「ありのままに生き、しなやかに学び、無理なく育てる（育つ）」

大会を記念して行われた講演会にて、上野浩道先生（東京藝術大学・お茶の水女子大学名誉教授）が話された言葉や上野小学校の子どもたちの姿から感じたことは、子どもの今ある姿を受け入れる子ども観を持つこと、子どもの造形的な創造活動の学びから自分自身の「感性」を磨いていくことである。日々の実践、教育会図工・美術委員会事業に生かしていきたいと思う。